

味をもつて居る遊びであるからよほど之を獎勵したいものと思つて居ります。

女は戦争をしないから尙武教育の必要がないといふやうな事も云へるでせうが、堅忍不拔なる精神、所謂鞏固なる意志は男も女も貴きも賤しきも如何なる人も必ずもたなければならぬものであります。古來孝子節婦の多くが下級の人にあるやうです。之れは一方艱難によつて心身を練磨した結果であらうと思はれます。ともかく意志の訓練といふ事は最大切な事であるから、幼い時から教育者或は保護者なるものがよく注意しなければならぬ事であります。どうも今の上流の婦人たちは意

志が強いとは思はれないやうです。所謂上流の奥さんたちの中に、一朝逆境に立つた場合、よく困難に堪へて平然として樂觀し得る人が幾人ありませうか。幼時から意志の鍛練を経て居ないと、事に出逢つた時立派な覺悟をもつといふ事はむづかしい事であります。

女兒も男兒も同様に必ず軍ごつこをさせなければならぬと云ふのではありませんが、常に尙武的教育即ち意志の訓練といふ事に重きをおいて、遊戯其他萬事を取扱つてやるがよいと思ひます。敢て幼児教育に従事さるゝ保姆の方々に伺ひます。(談話)

湖畔詩人に歌はれたる子供

文學士 福 島 政 雄

「愛らしき幼な子達よ。いまし等か母君の旅立ち

まし、よりはや一と月、明日こそは母君のかへり
來ますべき樂しき日なれ。」

お、楽しきしらせに嬉しき思は溢る。年上なる子は静かなる善びもておとなしくたゝずみたりしがやがて大聲に笑ひつゝ、聲高く叫びつ。母上やよ我か許へ來ませ。」

一聲は一聲より高く彼は叫びぬ。母君直にも我が許へ來ませとのさがなき望もてかれは叫びぬ。

「否、待てよしばし、幼な子、待てよしばし。母君はいましの聲きこえたまはじ。」われは山々のこと、はるかなる町々のこと、過ぎゆくべき長き長き谷々のことを語りつ。幼な子は耳傾けて惑ひぬるが如くいたく心亂れにしかどなほわれに従ひぬ。

妹なる幼な子の胸のよろこびさまたぐるものこそなけれ。我が人の世のさまたげすなる時と隔たり夜と晝との神祕はたかれをいかにせむ。自然のまゝにあふるゝ喜びは子猫のよろこび鳥のよろこび夏の蟲のよろこびにもたとへつべけむ。かれはあてもなく躍りつ走りつ喜びあまりては口に出づ

る言の葉草もをのづからに多し。今は兄も妹にあはせてその喜びの聲に答へ、はてはわが腕にいだかるゝ緑子いだきしめて其のなさけ強ひても得まほしき様なり。

やがて楽しき對話にうつりてわれらは庭の四阿に憩ひぬ。沈みゆく夕日は美しくかゝやきぬ。われらばわれらが爲したることをすべて物語りつ。流はやき小川のほとりそらありきて、美しき二羽の白鳥うかめて岸の柳の影うつす沼にゆきしことなど物語りぬ。逝きにし冬、さんざし山櫨の小枝の綠葉、巢つくりて囀る小鳥、げに「母君の去りたまひしよりこの方のことをつくして」物語りぬ。

あはれ幼な子等よ。いまし等は此の物語あどけなくくりかへして歸り來ます母君に語るか。新たに生れし鶯鳥の雛、驢馬の子、草原あゆむ羊の子これらをもいまし等は母君に示すならむ。

空をあふげば夕暮の星はあらはれて幼な子等の眠りにつくべき時となりぬ。幼な子等はしばし心

重く胸に悲しみを覺えつ。されどそもしばし嬉しげに戯れつゝ二階へとかけのぼりゆきぬ。あはれ、われにも其の嬉しき心のかよへるか、心のままの走りくらべ共にしたく思ふ心起りぬ。

五分間の後のしづけさーさきほどまでのさゝめきは消えて幼な子等は寢床の上にねむり、いそがはしき其の手はつゆ動かで輝く其の眼は閉ぢられぬ。あはれ夢はいづこにか通ふらむ。

二、

われは屢々ルーシー・グレイのことさゝしことありき。またわが荒れにし野邊をよぎる折々、曙の光にさびしげなる其の子を見ることもありき。

ルーシーは共に遊ばむ友とてもなく廣き荒野に住みたりき。かれこそは人の門べに生ひ出でしいとうるはしの少女なりしを、あわれ今は野べに遊べる鹿の子、緑の上の兎は見るもルーシー・グレイの美はしき面影再び見るに由なきをいかにせむ。

「今宵は嵐吹く夜ならむ。いまし町まで行きよ。燈持ちゆきて母上の雪のかへり路しるべしてよ。」
「父上、そはよるこびて參らむ。まだ正午をすぎて間もあらず。寺の時計は今二時をうちしばかりにてかしこには月かげも見ゆ。」

此の答きゝて父は鎌とりあげつ。やがて小枝の束きりはなちて仕事にとりかゝりぬ。ルーシーは手に燈をとりぬ。

山かける鹿よりも身は軽く、かれが足はいく度か粉雪蹴ちらして烟の如き雪はルーシーがゆくてに散りつ。あらしはまちしよりはやく吹き起りぬ。ルーシーはかなたこなたへとさまよひぬ。山より山へよぢのぼりぬ。されど目指す方の町は何處。

氣も狂ふばかりの父母は其の夜よもすがら大聲によびつゝとほくとほくとほくたづねてゆきたれどしるべとならむ聲もきこえず姿も見えず。曉方にかれらは草地見はらす小山のいたゞきに立ちぬ。いたゞきより見ればかれらが門口にいと近く木の橋見

ゆ。かれらは我が家人と向ひつゝ泣きてさげびぬ。

「天國にてわれらはあはむ。」時しも母は雪の中にルーシーの足あとを見とめつ。けはしき岡の端より下へとかれらは小さき足あとを辿りて破れし山楡の橋根をもすぎ長き石垣の側をも通りてやがて打ひらけたる畑中を横ざりしが足あととはなほかはることなかりき。かれらは其のあてをたどりて見失ふことなくかの橋のところへと來りぬ。

雪つむ堤よりかれらはその足あとを一つ一つと辿りゆきて橋板の半まで來りしがそのさきには一つの足とてもなかりき。

あゝされとルーシーは今日までもなほ生ける子なり、さびしき荒野にて美しきルーシー・グレイにあふことあらむといふ人あり。けはしきところをも平なるところをも飛ぶが如くに經ゆきて、決して後を振りかへることなく風にうそぶく淋き歌うたへるは今なほ生けるルーシー・グレイか嵐の路たどりゆく姿なりとぞ。

三

呼吸する音も輕げに手足に滿つる生命覺ゆる幼な子の、あはれいかでか死といふことを知り得べき。われは小さき賤が屋の少女にあひぬ。八つになれるといひしその少女のちやれたる髪はふさふさと額にかゝりて自然のまゝのかざらぬ姿やさしく着物もいと田舎びたるが双の眼はうるはしくいと美しくて其の美しさはわが心よろこばしめぬ。

「少女子よ、いましは男をみな同胞たち幾人か持てる。」幾人とや。皆にて七人！かれは答へていぶかしげにわれを見つめつ。

「その同胞たちはいづこに住めるか、われに告げてよ。」かれは答へぬ「われらは七人、二人はコンウエに住み二人は海に出でたり。二人は寺の墓場に横はれり——わが妹とわが弟とは。われは母上と共にその近くに寺の小屋に住むなり。」

「いましは、二人はコンウエに住み二人は海にゆき、なほ同胞は七人なりといひしよな。美しき

少女子よ、いかなれば七人とはいへる。」

小さき少女子は答へぬ。「われらは兄弟姉妹七人なり。われらがうちの二人は寺の墓場に、墓場の木の下に横はれる。」

「わが少女子よ、いましは走りまはりていましての手足には生命あり。二人は寺の墓場に横はれるならば同胞はたい五人のみならむ。」

小さき少女子は答ふ。「かれらが墓は縁にてわが母上の戸口より十歩あまりをへだて、見ゆ。二つならべるその墓の側にて、われは屢々沓下をあみ、わがカーチーフの縁ぬひ、その地の上に座りて、座りてわれはかれらがために歌うたふ。夕日沈みてあかあかと美しき折にはわれはわが小さき皿もちてかしこにてわが夕餉終ふこともあり。」

はじめに逝きしは小さき妹のゼーンなりき。かれは悲しみつゝ、床に横はりしが、神は遂にかれが苦しみをとり去りたまひて、かれはとほく去りぬ。かくて墓場に横へられしが、その墓の草の乾ける

頃にはわが弟ジョンとわれとはかれの墓のまはりにて共に遊びぬ。

地に白く雪の降りしく頃われは走りまはることのかなひたりしに、わが弟ジョンはとほく逝くべきこととなりければ、かれも妹の側に横はれるなり。」

われは問ひぬ。「もし二人は天國にあるならば同胞の数は幾人ならむ。」小さき少女子は答へて言ひぬ。「おゝ、われらは七人！」

「されど彼等は逝けり、かの二人は逝けるにあらずや。二人は天國にあるものを。」説けど甲斐なし、かの少女は、なほその心をおしとほして、述ぶる言葉かはらず。「否々、われらは七人なるよ。」

四、

あはれ湖畔の歌人ウオーヅウオースの美しき心に生ひいでてとこしへの花とにほへる幼な子の愛らしき姿よ。暖かき家に咲く花雪つもる野邊に咲く花、賤が屋の門に咲く花、花の色香こそさま

ざまなれ、いづれか美しき自然の懐にいだかる、
ゆかしき人の世の花ならざる。あゝたれか此の人
の世を荒涼の野邊とはかこちし。辿りゆく道のべ
に若草にほひ若草のかげにデイジーの花もほゝゑ
むものを。老いにし人は人の世のまゝならぬをか
こち、盛りの人は人の世のこちたきわざにその日
を忘れて、とこしへの泉汲まむとせざる中に、ひ
とりうら若草の花のみぞ此の世をかざる生命の花
にてはあるべき。行く手はとほく春のかすみの立
ちこむるまゝにまかせて今日の一日を美しく咲き
いでぬる花よ、あらしの風のはげしくて夕暮の野
に枯れしほむとも誰かはそのうるはしき一日の榮
をば見すつべき。淋しき野邊に見る人もなく榮え
朽ちぬともルーシーの名は、ルーシーの姿は、と
はに心とどめむ人の心に生きて、はげしき嵐の雪
の夜半、霜のあけぼの、荒野の末の道たどりつゝ、
淋しげなる歌にげにいかなる人の深き思をかさそ
ふらむ。

あはれ詩人よ、深きは君がこゝろかな。世の常
の歌聲も君がこゝろの心の琴の緒にひゞきては妙
なるしらべの泉とながれ、世の常なる小さきとも
君が心のかゝみにうつりては美しきみくにの面影
かよふ。われらは日々に幼な子と遊びわれらは日
々に幼な子の友となれどもうつし世のけがれにそ
みにしわれらが心はとはに澄みゆくによしもな
く、昨日の一日、今日の一日、むなく乾ける思に
送りて美しの花の一ひらうるほさむなさけの露だ
になく、げにかへりみればわれらは若草の野邊に
立てる枯木の柳か。春の風やわらかにそよぎ春の
霞美しくたちこむれども、身は人の世のあらしに
ゆらぎ、心は人の世の霜になやむ。あはれ此のわ
れらが心春にかへさむ由もがな。かくてとこしへ
の春の心にかへりて人の世の春の旅路に幼な子の
心みちびかまし。思ひあまりて沈みゆくわが心の
奥ふかくいづこともなく暖かき泉のわきいづるを
掬ふ手にあふるゝはげに遠き世の君が歌。湖畔の

君が春の歌に胸の氷は融けそめてとこしへなる春の
小川とながれゆく我が心あはれ此の心のよろこ
びをば君ならでたれにかさゝげむ。

否、君ならでさゝぐる人もあるものを、おろか
なるわれはまた幼な子を忘れてあらぬかたにさま
よひにけるかな。さなりわが心のよろこびもわが
心の泉もつくしてもて幼な子の美しき心にさゝげ
む。詩人よ、われは感謝の泉を君にうけてとこし
へに幼な子の花うるほさむ。

五、

たれか幼な時を春にはたとへし。此の人の世に
人となりて人の世の春の野邊たどらぬ人はなかり
けむを、げに春霞のたちこめて來し方の道いつし
か霞に消えゆくにも似て、奇しきは幼な時の心忘
れかく人となりし人の心かな。さはれ過ぎ來し方
の思ひ出はわれにも人にも樂しからむものをいか
なれば人はその樂しさを幼な子の美しき眼のかゝ
やきに思ひいでて樂しき道の美しき道しるべのわ

ざにはいそしまざる。

あはれ尊きは湖畔の詩人の心かな。美しき自然
を慕ひあこがれし詩人の心は幼な時の思ひ出にも
また美しき自然にかへりて自然の中にうるはしく
咲きいづる人の世の花をうたひぬ。幼な子の心に
入り幼な時のわれにかへりて詩人の思はとほくう
つし世のかなたに去りぬ。緑の草原も林の木にも
水の流れもうつし世ならぬ天上の光にかゝやきし
幼な時の思ひ出はげにいかばかり詩人の心の深き
琴の緒にふれにけむ。あゝかゝる思ひ出、深き心
の詩人ならでは得がたき思ひ出ながら人の世の春
の思ひ出はげにかくこそあるべけれ。かゝる思ひ
出に助けられてとこしへに幼な子の心みちびかむ
我等が身の幸おほさよ。あはれ自然の天空に虹は
來り虹は去りかゝやく星も照る月も過ぎゆく時を
刻みつゝ、水は流れ水は去り人は來り人は逝けど春
はとこしへに幼な子の心にやどりて天上の光はと
はに幼な子の眼にかゝやかむ。仰げば尊し自然の

姿、のぞめばふかし自然の心その姿とその心とを
そのまゝに咲きいでにし人の世の花こそ幼な子の
心ならむを、導きゆかむわれらが心のいつまでか
萎みしまゝに止みぬべき。

六、

思ひかへせば湖畔の詩人逝きにしよりこゝに六
十餘年、物かはり星うつりゆきて今はしも文明の
光世にあまねく、幼な子の心の園はありとしある
國々の片山里にまで満ちみちて、愛らしき幼な子
の手にとらるゝは自然の鍵、開かるゝは自然の扉、
フレーベルの志あまねく世に及びて幼な子の心の
花の蒼の日に日にはころびゆく様こそげによろこ
ばしくも美しきことのきはみなれ。

さはれ人に月日のさだめあり。心の園に心の花
照らす人の心の幼な子に通はでむなくすぐる日
日のみ多からばいかでか心の園にうるはしき榮あ
るべき。

さなり湖畔の詩人も歌へるが如く、人の心は月

と共に年と共にかはりゆきて、美はしかりし思の
いつしかにすさびゆけば、野邊のを鹿のごと躍る
心の躍るがまゝに高しと仰ぎし山の姿、深しとの
ぞみし川のながれも、いたづらに美はしかりし昔
の夢となりはて、今はたゞあへぐ思に心かはき、
空しく荒野より荒野へと辿りゆかむを、かくては
いかでか幼な子の清き心を導き得む。

されど自然を仰ぐ詩人の心にはすさべる思の燃
ゆることなく、むかしうれしき思さそひし瀧のひ
びき、そばだつ巖、深く暗き森の色のみかしのまゝ
の躍る心をさそふことこそなけれ、過ぎにし年月
は自然に深き思よせてこゝに悲しき人の世の静か
なる琴のしらべきかむ心を養ひぬ。沈みゆく夕日
の光にもまどかなる大海の水にも動ける氣にも青
空にも人の心にもみちみちし靈を感じて詩人はこ
こに感謝の言の葉をさゝげかへりて人の世の春の
心にとこしへの春の泉を汲みぬ。

あはれかくてこそ幼な子を歌へる詩人の歌に生

命あれ。かくてこそ自然の懐にいだかるゝ幼な子の心に光あれ。はたかくてこそ湖畔詩人の歌に人の世の春の旅路のしるべの力をも得らるゝなれ。われらはよのつねの幼な子の心をたゞあどけなしと愛でいつくしめど、よのつねのことによのつね

ならぬ深き心の泉汲まむことこそわれらが尊きつとめなれ。あゝ湖畔の詩人の心は今もなほ心の園の園守の心にかよひていとまたふときとはの教をわれらが心にもなほおごそかに宣るやいかに。

『ポール・ドンビー』（ヂッケンス）（四）

|| 英文學に現れたる子供（二十三） ||

岡田みつ

併しポールが始め幾分持つて居た元氣は銷磨して來てしまつて、奇妙な、老人めいた、考へ込む氣質の方だけが増々發達して來た。唯、彼はそれを人に示さなくなつたのが今迄と違ふので、日に彼の物思ひ、遠慮、沈黙は募つて校内の誰人に對しても親しむといふ事がなかつた。唯一人居るのが好きで、勉強をして居ない時は、家中をぶらつき歩いて見たり、階段はしごたんにいつて腰を掛けて、

廊下の大時計の音に耳を傾けたりするのが、何よりの娛樂であつた。家中の袂具の模様をよく知つて居て、人の思ひもよらぬ形に其を解釋したり、寢間の壁紙の紋様が小さい虎や獅子の型になつて居ると云つたり、床敷物ゆかぢものの正方形や菱形に恐ろしい顔がひそんで見えるなどと云つた。此伴侶のない子供は、妄想の描き出す唐草模様の中に捕はれて、人と掛け離れた生活をしてゐて、誰一人彼を